山口文象アーカイブのうち「１９３６年　青雲荘アパート・診療所」関連資料

「財団法人日本労働会館六十年史」（１９９１年　渡辺悦次）

１０２ページ～

第三節　アパート青雲荘と友愛病院の設立

一、低利融資の申請、許可まで四年越し

労働者アパート建設の低利融資を申請

一九三二　（昭和七）年十一月、財団法人日本労働会館は理事長松岡駒吉の名で大蔵、内務両大臣あてにアパート建設のための低利融資の貸付を東京府を通じて申請した。これについて翌年五月に開催の「昭和八年度総会」において臨時部予算にアパート建設費として一〇万円を計上、労働者のための安い住宅確保の事業に取り掛かった、と報告された。その建設のための低利資金貸付申請書、アパート建設の構想は次のとおりである。アパートは会館に隣接して建てるほか、新宿方面と大崎方面の、都合三つを建設しょうという壮大な計画であった。

ーーーーーーー

労働者アパート建設低利資金貸付申請書

一金　拾万円　也

都市在住労働者の住宅費は其の生計費の二割以上を占めしかも交通費の増大は更に其の生活苦を加重しつゝあります。本財団は此の事実に鑑み専ら熟練労働者並下級俸給者の為に快適にして安易なるアパート住宅を建設し概略左記の如き方途に依り之を遂行せんことを計画致しました。何卒特別の御詮議に依り右

低利資金を速に貸与下さいますやう此段申請致します。

昭和七年十一月　　日

財団法人　日本労働会館
理事長　松岡駒吉

大蔵大臣　高橋是清　殿
内務大臣　山本達雄　殿

ーーーーーーーーー

〔別紙〕

一、アパート建設費

建設費用総計　　金　拾万　円

但　建設場所三ケ所

木骨コンクリート建三階

一坪当平均壱百拾円也宛

右　内　訳単位円）

一、地上権取得費（二百坪）　　五〇〇〇

二、建築費

第一アパート　延坪三〇〇坪（芝区三ｍ四国町二）

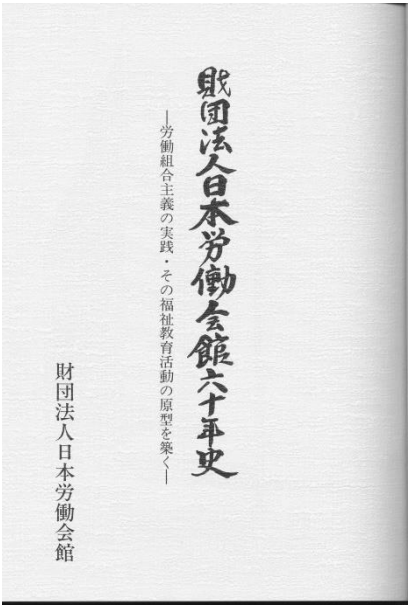
第二アパート　延坪三〇〇坪（目下土地選定中）

第三アパート　延坪二〇〇坪（　同　）

三、設備費一切　　七〇〇〇

〔以下原資料欠〕

一九三五　（昭和十）年に融資認可



一九三五　（昭和十）年五月三十日、前述の一九三二　（昭和七）年十一月に内務大臣宛に東京府を通じて借り入札を申請していた社会事業低利資金一〇万円に対して四万五、〇〇〇円の貸付認可の通知があった。

この貸付認可の経緯、一〇万円借入計画が四万五、〇〇〇円になった経過について当時の新聞は次のように報じている。

四年越の念願叶ひ総同盟が家主さん
うらぶれた組合旗も臆て　エプロンに蘇る？

財団法入日本労働会館理事長といふよりは総同盟の松岡さんで通る松岡駒吉氏の四年越しの努力が報いられて、同会館が経営主でモダンなアパートが建築さ牡下級サラリーマンや熟練労働者に快適な住居を提供しようといよ計画が愈々実現する。

労働組合がアパートの家主さんになるのは恐らく日本ではじめてであらう。

松岡氏が労働会館を基礎として「働く者」のアパートを建設しやっとプランをたてたのは昭和七年で、はじめは予算十万円で会館傍に一つ、新宿、大崎方面に二つ。合計三つのアパートを建てる計画で、同会の理事会、評議員会で発表したが満場異議なく可決された。

早速東京府を経て大蔵省に低利資金の借大方を申請したが仲々お役人が取合って呉れず、それから毎年申請をし続けて来たが通らず、やっと昨年末になって土万円は貸せぬが四万五千円位なら何とかするといふ返事なので、早速アパートを一つに減らし芝区三田四国町二の六の労働会館側百二十坪の敷地に建築することに決め、府から内務省社会局を経て大蔵省に書類を提出、この程内務省でも認可を与へたので今月末には借入手続一切が完了することになり、松岡氏も元気づき近頃は毎日慣れぬ手つきでアパートの設計図を書いてゐる。

それによると五十位の部屋を持つ鉄筋コンクリート三階建のアパート一棟と、木骨コックリート二階建の診療所一棟、合計二百七十坪といよ相当なもので、部屋の設備なども近代化し、真面目な熟練労働者や

下級俸給生活者をメンバーに獲得、組合員でなくてはなどといふ規定は設けず誰れでも歓迎しカップルでも結構といよ砕けた家主振り。
敷地が同財団の所有地であるから地代は不要、付近には大工場、官衛が多く交通も便利だから部屋はいつも満員といよ皮算用で一ヶ月六百円の部屋代をあげ、一ヶ年に四千円位の純益を得て十年後には同財団のものとなるので、同財団の財源となる一方、労働者の宿舎も出来るといふ仲々遠大な理想を持つ家主さんでもある。
松岡さんは設計図を前にし乍ら
都市に住む労働者の住宅費はその生活費の二割以上を占め、その生活難を脅かしてゐる。
私は専ら熟練労働者のため快適で安易なアパート住宅を建てたいと思って、四年越しうるさい程当局に願ひ出たんですが。
今度愈々借入が認可されて愈々建築に着手することの出来るのは何とも喜ばしい。
と言ってゐるが設計が出来上り次第早速工事に取掛かり今年末には出来上るといふ。
赤い組合旗の翻る下、浦洒なアパートなど「働く人々」の朗らかプロフィルが現れるのは一寸微笑ましい風景である。
（松岡駒古所蔵７　クラップの一九三五・昭和十年の記事　新聞紙名、発行月日不詳）

松岡理事長の卓越した先見性、目的の実現に向かって粘り強い努力を重ねていたことの一端が伺いしれる記事である。
東京府を通じて来た貸付決定言は次の通りである。
ーーーーーーーーーーーー
昭和十年五月三十日
学務部長
東京府書記官　自戸半次郎

芝区三田四国町二番地六
財団法人日本労働会館　　御中

住宅建設資金貸付ニ関スル件

曩ニ借入申込相成候標記ノ件金四万五千円也貸付決定相成候条左記御了知ノ上請求書提出相成度

記

一、借入ヲ了シタルトキハ別紙貸借契約ヲ締結スルコト
二、、右公正証書作成並ニ抵当権設定ニ要スル費用ハ貴会ノ負担トス

以上

――――――――――――――

この住宅建設資金貸付通告にもとづいて五月三十一日付けで「住宅建設資金借入申請書」、「財団法人日本労働会館住宅建設資金貸借契約書」を提出した。借入申請書は次の通りである。

――――――――――――――

財団法大日本労働会館の活動

住宅建設資金借入申請書

一、借入金額　　金四万五千円
二、資金ノ用途　　アパート建設
三、償還方法　　昭和十二年十一月一日迄据置爾後昭和二十八年十一月一日迄二半ケ年賦償還
四、完済期限　　昭和二十八年十一月一日

右借入致度償還年次表、同財源表添付此段申請候也

昭和十年五月三十一日

東京市芝区三田四国町二番地六号
財団法人日本労働会館　理事　　松岡駒吉

東京府知事　横山助成殿

―――――――――――

病院経営を計画

この低利資金の借入申請書の使用目的には病院経営のことが一宇も書かれていないが、この申請を出してから許可の出るまでの間に、松岡理事長を中心に実費診療の病院経営を計画、それを実現するために具体的な計画をすすめた。

その病院経営に乗り出そうとした背景には、この間の財団としての実力の充実、実績があった。一方、国内情勢は、一九三一（昭和六）年九月に勃発の「満州事変」によって準戦時体制が強まっていった。このため労働者は長時間労働などの労働過重がひろがり、その健康、医療問題が国民の大きな課題となり、勤労者、低所得者層が診療を受けられるような医療費の低減、「医療の社会化」が叫はれるようになった。

松岡理事長ら財団幹部はこの状況を観て取り、アパート経営と共に病院の建設、経営を計画、推進することにした。こうしてアパート建設と病院建設とが同時に取り組まれることになったのである。

申請書の「資金ノ用途」には病院建設とは一字も書かれていないのは、申請時には計画がなかったのと、開業医らの反発、反対を考慮しての当局側の指示に依るものと考えられる。

「医療の社会化」というスローガンは当時としては未だ「危険思想」に近いものとして考えられていたのである。

申請書の外に借入契約書も提出した。なお、契約書と申請書に記された償還年次表は次の通りであり、財源表は財団の財産目録の土地、建物と同一であるので省略した。

借入金償還年次表（借入額四万五千円）　（コピー略）

二、青雲荘と友愛病院の建設

理事会、建物の建設決定

財団法人は、低利資金貸付決定を受けて一九三五（昭和十）年六月三十日に開催の理事会で

一、アパート、診療所建設資金借入の件

一、同上借入に付本財団本館を担保として登記の件

を審議、決定し、いよいよ建物の建設に取りかかることになった。

新進の建築家山口文象に設計を依頼

まずアパートと病院の設計は、ドイツで学んで帰国し、一九三三（昭和八）年に日本歯科医学専門学校付属病院の設計で脚光をあびた新進気鋭の建築家山口文象に委嘱した。この設計の委嘱と入札の経過に就いて昭和十年度の『財団法人日本労働会館事業報告書』は次のように報告している。

診療所及びアパートの建築

さきにアパート及び診療所建築資金として、東京府を通じて申語中であった低利資金の借入は、十年五月三十日四万五千円の認可あり、六月一日松岡理事長東京府へ出頭して受領した。のち直ちに設計者の詮衡に入り大学、同潤会、一般設計家等に渉りその適任者を物色した結果、新進設計者として斯界の注目の的となってゐる山口蚊象氏〔のち文象となる〕の特別なる契約を得るに至り、十月設計終了と共に、請負入札をした。

入札に応じたる請負者は五社に及んだが、その妥当性を検討した結果、合資会社旗手組を最も適当と認

めて十一月二十一日、三万五千五百円にて落札、契約を締結、調印を了へた。

建築家山口文象の横顔

この建物の設計をした山口に就いての略歴を山口文象はか著『建築をめぐる回想と思索』薪建築社、一九七六年刊）の中の「山口文象」、近江栄・藤森照信編『近代日本の異色建築家』（朝日選書、一九八四年刊）『建築家山口文1　人と作品』（相模書房、一九八一年刊）によって紹介しておく。

山口は一九〇二（明治三十五）年、東京・浅草の祖父が宮大工、父親が清水組大工棟梁の家に生まれた。東京府立第一中学校に合格したが入学式に出ただけで、父親の「われわれの階級で中学に行くなんていうのはもってのほかである」との二言で退学させられた。そして東京高等工従弟業学校付属職工学校木工科大工分科に入り、一九一八（大正七）年卒業、清水組定夫となった。建築家への夢が膨らみ、向学心強まり、清水組をやめ、親から勘当されるも新進建築家が集まっていた逓信省営繕課に職を求めた。そこで製図工をしながら上司の帝国大学出の建築家の指導を受け技量を磨いていった。

一九二三（大正十二）年の関東大震災のときの翌年、復興局の嘱託技師となり、壊れた東京、横浜の橋の意匠デザインを多く手がけた。代表的なものに東京・墨田川にかかる清洲橋がある。このあと東京朝日新聞社社屋、日本橋の白本屋の設計主任などをしたが、さらに勉学のため一九三〇（昭和五）年にドイツに渡った。ベルリンエ科大学、ダロ7　ビウスアトリエに在籍し新しい建築学を学んだ。この間、在独の左翼作家藤森成告、演劇関係の千田是也、佐野碩らと交流した。一九三二（昭和七）年に帰国。帰国直後に日本歯科医学専門学校付属病院の設計で脚光をあび一躍新進建築家として認められた。一九三四（昭和九）年に出目文象建築事務所を開設。以後日本の代表的建築家として活躍。

戦後、一九五三（昭和二十八）年にＲＩＡ建築綜合研究所を開設。多くの建築を残し一九七八（昭和五十三年）に七六歳で逝去。

青雲荘、友愛病院の建設と建物の規模

友愛病院、青雲荘の建設は旗手組によって一九三五（昭和十）年十一月から着工され、翌一九三六（昭和十一）年六月に完工した。

その建物は「一階全部九拾九坪一介八勺を経費診療所として使用する様設計し」、後出の平面図のように鉄筋三階建て部分と木造二階建て部分からなり、鉄筋一階に病院、その鉄筋に続く木造一階と二階、三階をアパートとし、室数は全部で三六室あった。

旗手組との「工事請負契約書」によると、建築の工期は「警視庁建築課ヨリ許可証下付ノ日ヨリ起算六ヶ月トス」であった。契約書には、松岡理事長の事業にとりかかる際の慎重さ、緻密さが各条文に惨みでており、事業を推進する場合の心構えを教示している内容であるので次にその全文を紹介する。

工事請負契約書

一、工事箇所　東京市芝区三田四国町弐ノ六

一、工事名　財団法人日本労働会館青雲荘アパート

一、請負全額　金三万五千五百円也

一、契約保証金　無シ

財団法人日本労働会館理事長ヲ甲トシ１　資会社旗子組　代表社員佐藤栄一郎ヲ乙トシテ右工事ヲ前記金額ヲ以ツア請負契約締結ス　其ノ条項左ノ如シ

第一条　乙八本工事ヲ左ノ期間内ニ竣工スルモノトス

警視庁建築課ヨリ許可証下付ノ日ヨリ起算六ヶ月トス

第二条　乙ハ契約締結ノ日ヨリ五日以内ニ工事実施ノ順序プ記載シタルエ程表ヲ作り甲ノ承認ヲ受クルモノトス

第三条　乙ハ別紙設計書並ニ図面及ビ前条ノ工程表ニ基キ甲ノ指揮監督ノ下ニ工事ヲ施行スルモノトス

乙ハ本工事ニ関シ前項ノ設計言及図面子記載ナキ事項ト雖工事ノ性質上当然必要ナルモノハ甲ノ指揮ニ従

ヒ乙ノ費用ヲ以テ施エスルモノトス

第四条　乙又ハ其ノ代理人ハ常ニ現場ニ出頭シ工事ヲ担当処理スルモノトス

但シ甲ニ於テ其ノ代理人ヲ不適当ト認ルトキハ乙ニ於テ遅滞ナク交代セシムルモノトス

第五条　乙ノ負担ニ属スル材料ハ其ノ使用前甲ノ検査ヲ受合格シタルモノニアラザレバ之ヲ使用スル事ヲ得ス其ノ不合格品ハ遅滞ナク現場ヨリ持去ルモノトス

第六条　乙ハ工事竣工シタルトキハ直ニ甲ニ届出テ其ノ検査ヲ受クルモノトス

前項ノ検査ニ合格シタルトキハ之力受渡ヲ完フシタルモノトス　但シエ事ノ瑕庇ニ付テハ其ノ責ヲ免ルルコトヲ得サルモノトス

第一項ニヨル検査ノ結果改築又ハ手直シヲ必要ナリト認メタルトキハ一回限り相当期間ヲ指定シ第一条ノ竣工期限ヲ延長スルコトアルヘシ

第七条　工事ノ目的ニ対スル所有権ハ完成前ト雖工事施工ニ従ヒ逐次乙ヨリ甲ニ帰属スルモノトス

但シ目的物ニ関スル総テノ損害ハ原因ノ如何ヲ問ハズ前条第二項ノ受渡完了前ニ於テハ乙ノ負担トス

乙ノ持込工事用材料ニ関シテハ前項但書ヲ適用スルモノトス

甲ノ交付材料ハ乙ニ於テ善良ナル管理者ノ注意ヲ以テ之ヲ管理スルコトヲ要ス　其ノ亡失毀損ニ対シテハ天災事変其ノ他ノ不可抗カユ因ル場合ヲ除クノ外ハ其ノ責ヲ免ルヽコトヲ得ス

第八条　乙ガ毀庇修補セサルトキハ其ノ他本契約ヨリ生スル義務ヲ履行セサルトキハ甲ハ乙ノ負担ヲ以テ之ヲ執行スルコトヲ得ルモノトス

第九条　請負金ハ工事受渡後乙ノ請求ヲ受ケタル日ヨリ三日以内(休日ヲ除ク)ニ之ヲ支払フモノトス　但シ特別ノ事由アル場合ハ此ノ限りニ在ラス

甲ハ工事全部ノ受渡前ト雖部分検査ヲ終了シ受渡シタル部分ニ対スル代価ノ十分ノ九以内ヲ乙ノ請求ニヨリ支払フコトアルヘシ

第十条　乙ハ第一条ノ期限内ニ工事竣エセサルトキハ延滞一日毎ニ請負金額ノ千分ノ三ニ相当スル金額を違約金トシテ甲ニ納付スルモノトス　但シ工区毎ニ竣工期限ノ定メアルトキハ各別ニ之ヲ計算スルモノト

ス

前項ノ違約金ハ天災事変其他甲ニ於テ正当ノ事由アリト認メタルトキハ乙ノ申出ニ因リ之ヲ減免スルコトアルヘシ

第十一条　甲ハエ事ノ変更又ハ増減ヲ為スコトヲ得　此ノ場合ニ於テ請負金額ハ乙提出内訳書ノ単価ニ依リ若シ甲ニ於テ之ニ依ルコトヲ得スト認ムルトキハ甲ノ認定ニヨリ之ヲ増減ス

甲ハエ事ノ中止ヲ為スコトヲ得　此ノ場合ニ於テ乙ハ甲ニ対シテ何等ノ請求ヲモ為スコトヲ得ス

前二項ノ場合ニ於テハ甲ノ認定ニヨリ竣工期限ヲ伸縮スルコトアルヘシ

第十二条　甲ニ於テ必要アルトキハ本契約ノ全部又ハ一部ヲ解除スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ甲ハ履行部分及甲ニ於テ必要ト認ムル乙ノ持込材料ニ対シ甲ノ相当ト認ムル金額ヲ交付シ之ヲ引渡ヲ受クルモノトス　其ノ他ノ材料機械工具等ハ乙ニ於テ遅滞ナク引取ルモノトス

第十三条　乙カ左ノ一ニ該当スルトキハ甲ハ本契約ノ全部又ハ一部ヲ解除スルコトヲ得

一、乙カ期間内ニ契約ヲ履行セサルトキ又履行ノ見込ナシト甲ニ於テ認定シタルトキ

二、乙カ正当ノ理由ナクシテ甲ノ指揮ニ従ハサルトキ

三、乙カ契約ノ履行ヲナスニ当リ之ヲ粗雑ニシ又ハ品質数量ニ欺問ノ行為アリ或ハ不正ノ所為アリト甲ニ於テ認定シタルトキ

四、乙カ契約解除ヲ申出タルトキ

五、前各号ノ外乙カ本契約ノ条項ニ背シタルト甲ニ於テ認定シタルトキ

尚乙ノ履行部分及持込工事用材料ハ甲ニ於テ相当ト認ル全額ヲ交付シ之カ引渡ヲ受クルコトアルヘク其ノ他ノモノハ乙ニ於テ遅滞ナク引取ルヘシ

乙ノ責ニ帰スヘキ事由ニヨリ履行不能トナリタル場合ニ於テハ前項ノ規定ヲ適用ス　本条契約解除ハ遅滞違約金ノ徴収ヲ妨ケサルモノトス

第十四条　甲カ乙ヨリ取得スヘキ金銭アルトキハ直ニ請負金又ハ契約保証金ト相殺シ尚不足アルトキハ之ヲ追徴スルモノトス。

第十五条　本契約ヨリ生スル乙ノ権利義務ハ之ヲ譲渡シ又ハ担保ニ供スルコトヲ得ス
第十六条　乙ハ前条ニ掲クルモノノ外日本労働会館ノ会計規則及入礼者心得ヲ尊守スルモノトス
第十七条　本契約ニ関スル訴訟ニ付テノ管轄裁判所ハ東京地方裁判所タルコトヲ合意ス
右契約ノ証トシテ正副各壱通ヲ作製シ甲乙各壱通ヲ保管ス
昭和拾年拾壱月弐拾壱日

事務所　東京市芝区三田四国町二番地六号
財団法人日本労働会館
理事長　松　岡　駒　吉

住所　東京市囚谷区麹町十二「j目六番地
請負人　合資会社　旗　手　組
代表社員佐藤栄一

地鎮祭

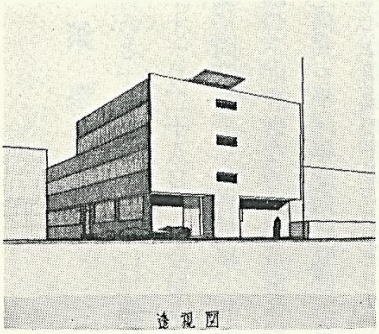
このあと十一月二十八日に地鎮祭を次のように行ない、工事を進めていった。

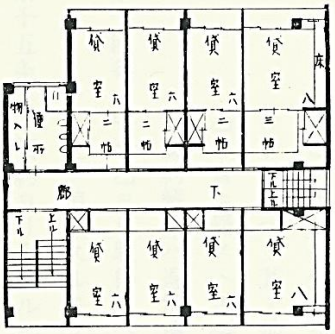
……十一月二十八日、社会局より赤松労働部長、持永保護課長、灘尾福利課長、警視庁より北村労働課長、同潤会より宮沢理事、設計監督技師長山口文象氏、旗手組佐藤代表社員等幾多輝ける来賓の御貢臨の下に荘厳なる地鎮祭を挙行し、直ちに着工、十年内に既に基礎工事を終わり、十一年三月十七日上棟式を挙げ年度内に既に工事の八割弱を了へるに至った。

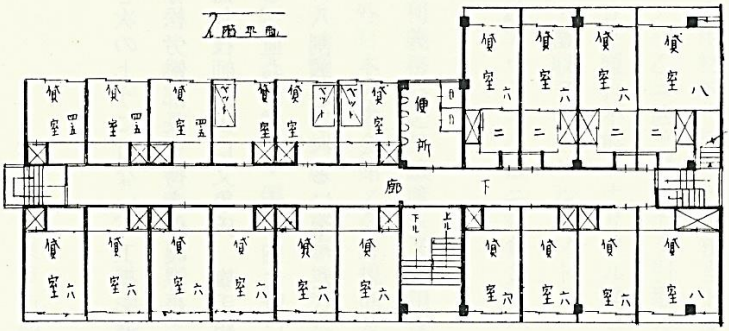
五月末には落成の予定である。

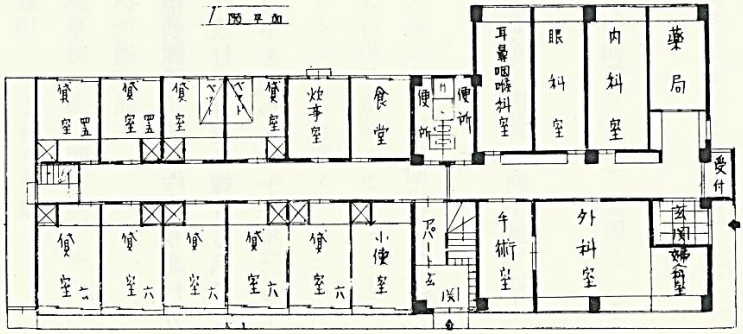
（前出報告書）

トーパア荘雲青・院病愛友









120ページ　友愛病院。青雲荘アパート図面

第四節　友愛病院と青雲荘の運営

一、日本で最初の労働組合により設立の病院

友愛病院、青雲荘の完工

建物の建設は順調に進んでいつた。竣工を前にして一般新聞は「総同盟が始めるアパートと病院芝園橋畔　三層楼」との次の記事とか「最新式設備を誇る芝園アパート竣工　旗手組の犠牲的努力」（両記事ともＲＩＡ社所蔵スクラップ・紙名、月日不詳）などとの見出しで大きく報道した。

総同盟が始めるアパートと病院　芝園橋畔　白亜の三層楼

全日本労働総同盟がアパートを始める。場所は三田四国町の芝園橋畔日本労働会館の隣だ。白亜の三階建、新人山口蚊象氏の極めてモダーンな設計になつてゐる、この計画は労働会館多年の懸案で昨年五月政府から四萬五千円の低利資金を借り受けて昨年十月工事に着手、流石に管理人松岡駒吉氏は宿望を達して嬉しそうだ。

一階は全部勤労階級の医療費軽減のスローガンを実践化した友愛病院にあててゐる、洋式病室二間、日本病室七間で各科を網羅した綜合病院、レントゲンと太陽灯も一両日中には運びこまれる。病院長には日本医大教授中川博士が献身的に働いていてくれ社會医学で鳴らした安田徳太郎博士や虎之門外科病院長福田洋洲博士が好意的に応援することになつてをり、その他新進スタッフで萬全を期してゐる。

二階と三階は青雲荘アパート部屋敷二十九、一般勤人と熟練労働者を入れるそうだ、電燈を入れて畳一枚三圓、ガラスをふんだんに使つてぜいたくな建物だけに部屋は明るくて気持ちが良い。

友愛病院の開院

アパートは建物が建てば開業出来るが病院は設備、医者らスタッフの問題がある。一九三六（昭和十一）年に入って建物の完工を前にして病院のスタッフの選任が進められ、中川鉄治郎院長らが決まり、七月開院へとむかった。病院は歯科を除く全科の診療を行う総合病院である。

●総同盟機関紙『労働』1936・昭和目年7月1日号に載った友愛病院開院広告

七月一日、友愛病院は盛大に開院となった、

病院開院の目的は「医療の社会化を理想とす」るものであり、「勤労者本位！　実費診療！・」がモットーであった。「当時は国民健康保険制度など無く、松岡理事長をはじめ総同盟幹部は日常の活動のなかで労働者、貧困者が病気になってもおいそれと医者にかかれず、病気を重くしていっていることを見ており、誰でもが安心してかかれる実費診療の病院があればという願いがようやくにして実現したのである」（大池清次理事長談）。

友愛病院開院時のスタッフは、総同盟機関紙『労働』の開院広告によると次の通りである。

院長　医学博士　中川鉄治郎
医師　医学博士　安田徳太郎　医学士　岡野統与　医学士　吉田　幹
薬剤師　菊池美喜
主任産婆　松尾キミ
このほか看護婦多数

このスタッフのうち、中川院長は日本医科大学教授で安田博士は社会医学の権威者であり、それぞれもその道の権威者、新進の医学者からであった。

院外出張診療

病院は日常的な本院での診療活動とともに、開院の年の一九三六（昭和十一）年の歳末に労働者街に出

張して診療を行なった。診療は好評であった。それは、「十二月十日より、大森、城東、五反田方面に於いて労働組合支部と連絡をとり、一般無産家庭に呼びかけ、親切、周到なる治療に当たり、労働組合経営の診療事業としては初めての試みであつたが被治療者二百名に及び大好評であった」（『労働』一九三七・昭和十二年一月一日号）。

実費診療、開院一年の実績

友愛病院は一九三七（昭和十二）年七月で一周年を迎えた。『『医療の社会化』を目指して、我総同盟本部脇に堂々開院した友愛病院は、既に一ヶ年を経過したが、その完備せる設備と親切と料金の低廉とによって漸次利用者の増加を見、最近に於いては、赤字を克服して収支償ふ程度にまで良成績を示している」と総同盟機関紙『労働』の七月一日号は報じている。

そして、友愛病院は七月十九日に一周年記念会を関係者を招いて開いたが、その席上、中川院長は挨拶の中で次のように生活の貧しさを反映した社会病理の実態、友愛病院の役割、意義などを報告した。

友愛病院一周年を迎ふ中川院長の報告

今や国の朝野をあげて、国民の保健衛生が問題化されて、いよいよ保健社会省も設立される機運になり、医療の社会化はますます重要性を加へて来ました。

過去一ヶ年の私共の病院活動の第一線に立って見ると、千人に一人といふような珍しい病気、むずかしい病気は少なく、ありふれた病気が多い。例へば、胃腸病の二十二パーセント、胸部疾患の二十七パーセント、トラホームの二十八八Ｉセント、小児の気管枝カタルの三十三パーセント、急性淋疾の二十三八ーセントといふやうな数字が現れている。従って珍しい病気の理論よりも、実際的に大衆的に治すことが一番必要であり、要求もされてゐることがわかります。

この点から見ても、経費診療の重要性があると思ふ。そして一般大衆的にありふれた病気は、重くならないうちに早期に癒すことが結果から見ていゝので、積極的に早期治療をする事が考へられるわけであり

ます。

患者の層は大体勤労者階級で諸所の経費診療所を歩いてゐた人が多く、従って過労の入、栄養不良の人が多いそうです。事情が許す限り、栄養を多く取り、過労を防ぐことの必要が痛感されます。尚患者及びその家族と親しくなって、平生の衛生生活、病気予防の相談相手になって、保健の指導に当ることが私共として進んだ、理想的な使命であると思ふのです、

経営方面からいふと、まじめな診療をする時は或程度まで経費はかゝるものであり、その最低限度はきまってゐるので、無闇に経費の低下を目標としては、責任あるまじめな治療は行はれない。この病院が過去一ヶ年の全収入、支出の総計を発表したが、これは治療費の最低限度の調査とも見られ、それによって一方医者が成り立って行く限度もわかるといよものです。

病院経営に関する諸種の経済的な統計発表がいまだかつて無い時、友愛病院の過去一ヶ年の事業報告書は、いろいろの点で意味深いものである〔注・この報告書は見っかっていない〕。

友愛病院は所謂経営術を心得てゐる者の経営でなく、世間一般の薬価の相場を知らず、合理的なトリックのない、赤裸々な数字であって、将来の経費診療に大きな示唆を与へるものと思はれます、いまだ収入と支出のバランスがとれてゐない点は、患者数の増すことによってうめられると思ふし、薄い利益を見つもやっていける自信、発展の可能性を信じてゐるものです。(『労働』一九三七・昭和十二年八月一目号)

この中川院長の報告は、友愛病院の実績の報告、経営分析にとどまらず、当時の日本の医療、開業医の多くが利益追求に走り、そのため、もっとも医療を必要とする庶民、労働者層が診療を受けられない実態の一面を明らかにしている。

総同盟組合員、家族に医療サービス実施

病院は、その一年間の実績をも勘案して七月から総同盟組合員とその家族に対する医療の特別割引を実施することを決め、契約を総同盟との間で締結した。その内容は

一、無料診察

二、手術及び入院料一割引
三、事情によっては特別な相談に応ず
であって、その診察券は総同盟本部、関東同盟会、各連合会、組合、支部などで渡す、とした。
なお、前年の年末の出張診療の成功から、ふたたび一九三七（昭和十二）年七月二十六日より十二日間、東京市内、埼玉県川口市、神奈川県川崎市で出張診療を行った。さらに事変勃発により出征軍人家族の無料診療をも開始した。出張診療の状況は次の通りである。

貧困者のために活躍する友愛病院

友愛病院では七月二十六日より八月十日までの十二日間、東京市内の大森、品川、城東、荒川等の労働地区及び川口、川崎の両市に出張し、夏季無料診療を行ったが、日頃診療の機会のない労働者並に家族は続々と押し掛ける有様で社会的にも大きな反響を呼び起こし、新聞紙の地方版を賑はした。診療に使用せる場所は、労働会館が二ヶ所、組合事務所が二ヶ所、小学校講堂が二ヶ所である。取扱ひ患者数は一千四十名でこれを延人員にして一千二百名となる。尚各区別に見ると次の通りとなる。

川崎市（神奈川県）　二〇〇名
大森区　二〇〇名　品川区　コー六名　城東区一三一名　荒川区　一八八名
川口市（埼玉県）　一九二名　計一、〇四〇名

尚、同病院は、今次の日支事変勃発と同時に、出征軍人家族の無料診療を開始し、銃後運動の先端に立って活動してゐる。（『労働』一九三七・昭和十二年九月一日号）

中川院長の出征

友愛病院開院一周年を迎えた一週間後の一九三七（昭和十二）年七月七日に「支那事変」が勃発した。この事変に中川鉄治郎院長は陸軍軍医少尉として召集され、九月十四日に入隊することとなった。そこで九月十一目の夕刻より日本労働会館で送別会を開催、病院従業員、総同盟本部常任、在郷軍人、町内会の

多数が参加した。終了後全員で中川院長を送った。院長は「中支那派遣軍」に所属して各地を転戦、翌一九三八（昭和十三）年四月に次の便りを戦地から病院に寄せているので紹介する。

戦地同志の便り

中支那派遣軍　中川鉄治郎

謹啓　陳者毎々御懇切なる御慰問に接し、御芳志千忝く感銘致し幾重にも御礼中上候。御熱誠なる銃後の御後長の御蔭にて今日まで無事御奉公相続け居候間休心下され度候。

出征以来〇〇月〇〇地に到着以来時々郊外に敗残兵の襲撃らしきものこれあり候も、比較的長閑に勤務致居り候　銃後の御後援に対し中訳なき心地致し居候。本部の皆々様へよろしく御伝へ下され度候。

（『労働』一九三八・昭和圭二年五月一目号）

中川院長の応召が長引いたため、島田博士が院長代理を務めた。だが、島田博士が急逝したため、安田徳太郎博士が院長に就任した。中川院長は、その後除隊、帰国し、ふたたび院長に就任した。

なお中川院長は再度応召し、敗戦はビルマ派遣第五十三師団第一野戦病院の軍医大尉で迎え、翌一九四六（昭和二十一）年に帰国、千葉市で開業、一九七九（昭和五十四）年に逝去された（ご子息の中川病院長中川洋氏談）

安川竹十は一九四二（昭和卜七）年六月、尾崎・ゾルゲ事件に連座した、その自伝に『思い出す人びと』（一九七六年六月、青土社刊）がある。しかし、この自伝には友愛病院、関係者についての記述はない。

二、病院開院三年間の実績

病院は、一九三九（昭和十四）年七月一日に開院から三年の歴史を刻んだ。この間の活動について昭和十三年度『財団法人日本労働会館事業報告書』（一九三九・昭和十四年四月刊）によって紹介する。

友愛病院

国民の健康増進のために「医療の社会化」を期して勇躍開始した本病院も既に三年に垂んとする歳月を経過した。その間同業者からは異端者として幾多の妨害を受けたが、他方一般患者からは益々その特異性を認められ、その声価も漸く一般化し、軍需工業の中心地たる川崎地方に於いては労働者階級の熱烈なる要求より、ある労働組合の如きはその大会に於いて本病院分院の建設方を決議申請した程である。

併し、その経済状態は、別表にも示す如く、その利用者増加にも拘らず、未だ予算通りの成績を治め得ることが出来ないで居る。その主なる理由は、既に三年に渉って本病院の柱石たる中川院長が応召中であること、事変以来の薬品、消耗機材等の暴騰、出往者遺家族の無料診療の敢行等によるもので、之等は何れも我が国現下の大方針と国策に合致し居り、我が病院の事業の方向が誤ってゐない証左であることを喜ぶものである。

事変出征軍人、軍属遺家族に対しては引続き無料診療を行ったが、その手続きは極めて簡便で徒らなる形式を排したので一般から頗る好感を持たれた。

又、本病院の如き低廉な医療費の負担にすら耐へ得ざる窮乏者のためには、同様無料診療を施したが、地理的に距ってゐるために、本病院を利用し難い窮乏者の人々のために従来施行して来た「無料出張診療」は、前記の如く中川院長の出征に加へ、代理院長島田博士の逝去等のために遂に年度内に於て実行出来得なかった事は甚だ遺憾であった。

イ、外来患者取扱数

	本年度	十二年度	十一年度
実人員	六、六三七	四、三三三	二、七八二
延人員	二三、二三三	二九、二五六	二一、六三四

ロ、入院患者取扱数

	本年度	十二年度	十一年度
実人員	二三六	二四六	九二
延人員	二、四七九	二、八三一	一、〇七六

ハ、診療患者取扱数

	本年度	十二年度	十一年度
実人員	七八	二一七	八一
延人員	二二四	六三六	一三一

ニ、出征軍人軍属家族無料診療取扱数

	本年度	十二年度
実人員	九六	五九
延人員	五三八	三五一

ホ、診療科目及職員

院　長	医学博士　中川鉄治郎（出征中）
内科、小児科	医学博士　名和幸太郎
外科、皮膚科、泌尿器科	医学士　小川左右樹
産科、婦人科	医学博士　中川鉄治郎
耳鼻咽喉科、眼科	医学士　中村順次
レントゲン科	東京女子医学士　鶴淵ふみ
	技　師　大串幸夫

薬剤師　　菊池美喜
主任産婆　　福井うゑの
事務長　　遠藤義明
外、薬局助手、産婆、事務員、炊事婦、十五名

この報告は、病院開院の本来の目的である「医療の社会化」のための実績が着々とおさめられつつあることを示しており、しかも、困難な中での奮闘ぶりが伺い知れよう。

三、青雲荘の経営

アパート青雲荘は、友愛病院に隣接して建てられ、病院の開院に先立つ一九三六（昭和十一）年六月に貸し室を始めた。完工を待ちかねるようにして同月中に半数の部屋が埋まる程の好調なスタートで、事業成績は、「第二年次を迎へた本事業は、幸いに需要者の希望に合致して、順調な成績を収め本年度に於て四千七百円弱の繰越金を得る事が出来た」（「昭和十二年度　財団法人日本労働会館事業概況」『関東同盟　第拾六回大会報告書』一九三八・昭和圭二年十一月十二日刊）。

この事業の好成績とともにその建築の斬新さは建築学会などの注目を浴びた。『建築世界』一九三六（昭和十コ年十一月号や『美術年鑑』にも紹介されるほどであり「昭和十二年度　事業概況」（関東同盟会『第拾六回犬会報告書』）は次のように報告している。

更に喜ぶべきは、本アパートの建築が、建築専門家間に広く注目さるゝところとなり、大学専門学校等より屡々視察研究に来り、斯界の専門雑誌も亦之を掲載し、文部省美術研究所にて編纂した昭和十二年度版美術年鑑の如きも之を同年度内に於けるアパート建築中唯一の代表的なものとして掲載し、尚遠く外国専門雑誌にも紹介されたとの事にて、本事業がかゝる方面に於ても一の記録を残し得た事である。

建築構造の斬新さ、アパートメントハウスという言葉の響きの斬新さは高級アパートという印象を一般に与え、当時、新進スターであった上原謙一家も住んでおり、友愛病院の若い看護婦さんに騒がれたというエピソードもあった（当時、友愛病院の看護婦をされていた斉藤いくの・旧姓渋谷、竹谷ハツ子・旧姓橋牛肉氏の談話　一九九〇（平成二）年十二月二十七日聞き取り）。

青雲荘の経営はその後も順調にいったが、太平洋戦争末期の東京空襲が激しくなるにつれ入室者が減り、苦しくなり、一九四五（昭和二十）年五月の空襲で青雲荘の建物は完全に消失した。

１５３ページ

第三章　総同盟の解散と財団法人日本労働会館の活動

―一九四〇・昭和十五年～四五・昭和二十年八月―

概　観

財団法人日本労働会館の事業活動は、労働組合運動と同様な歴史的運命をたどった。準戦時体制も一九三七（昭和十二）年七月に勃発した「支那事変」により戦時体制へと進み、政治経済、社会全般に大きな影響を及ぼした。とりわけ労働組合などの社会運動は厳しい状況に追い込まれた。

労働組合運動の死命を制したのは、戦時生産力拡大、その労働力統轄のために労働力の一元的統制を図った政府の政策に便乗した産業報国会運動であった。協調会を中心に事変後の時局対策の研究の中から翌一九三八年に産業報国連盟が生まれ、それが組織を急激に拡大していくや、政府が直接それの指導に乗りだし、労働組合組織を解消し、それに統合しようとした。

この関係当局の動きに対して総同盟は労働組合と産業報国会組織との並存を主張したが容れられず、一九四〇（昭和十五）年七月に総同盟も解散に追い込まれ、戦前の日本の労働組合運動はその幕を閉じた。

財団法人日本労働会館は解散を免れたが、その一心同体とも言うべき総同盟の解散は致命的であり、財

団所有の地方の分館は経営が出来なくなり一一分館のうち七つの分館をその後処分した。
総同盟解散後、財団は病院、アパート、食堂の経営に力を注いだ。だが、それも一九四一（昭和十六）年十二月の太平洋戦争開戦後の統制経済の進展とその後の空襲の危険のために経営が苦しくなった。そして、一九四五（昭和二十）年五月の東京大空襲に依って日本労働会館、友愛病院、青雲荘が消失した。これより前の四月の川崎大空襲で第二友愛病院、第二青雲荘も消失した。また残った因島、西宮、川口、城東の四分館のうちの西宮と城東の分館、神楽坂食堂も戦災で消失した。

第一節　総同盟の解散

一、総同盟の解散と財団法人の事業の縮小

一九三七（昭和十二）年七月七日の「支那事変」勃発による日中全面戦争への進展は、国内の経済、国民生活の全般にわたって「聖戦完遂」のためにと統制が強化されていった。
事変翌年の一九三八（昭和十三）年には戦争遂行、生産力増強のために労働力の一元的統括が緊急の課題となった。これに乗じて産業報国運動が協調会、愛国労農同志会などを中心に立案され、実行に移された。それが同年七月三十日の産業報国連盟（産報）の創立大会となった。
この産報運動の発足によって労働組合運動は非常に困難な状況に追い込まれた。産報の設立に対して石川島造船所の石川島自彊会などの一部の労働組合は組織を解散、改組して参加していった。
総同盟は、事変勃発直後の一九三七年十月の全国大会で銃後三大運動を決定、時局に対応した。そして、産報運動に対しては、労働組合と産報との組織的並立、並存を主張した、だが、当初、産報運動に距離を置いていた政府であったが、組織が進展するにつれ、総動員体制、生産力増強のための労働者組織としてれを重視しはじめ、さらに労働組合を解体しこれに一元化しようとした。
こうして、一九四〇（昭和十五）年十一月二十三日に産業報国連盟を改組し、政府の直接指導、運営に

よる大日本産業報国会（産報）が創立されたのである。
この大日本産業報国会の結成に先立って、その計画が煮詰まるにしたがって総同盟をけじめとして残っていた労働組合の解散を政府・内務省、厚生省が強要してきた。このため、一九四〇（昭和十五）年七月八日に総同盟は中央委員会を開催、組織の解散を決め、解散宣言を発表、同月二十一日に全国代表者会議を開催して解散した。
財団法大日本労働会館は、労働組合ではないので解散をまぬかれたが、その母胎である総同盟の解散の影響は決定的に大きかった。本部会館の運営、業務のうちの労働学校、共済事業は総同盟解散とともに自動的に閉鎖、解消せざるをえなかった。地方の労働会館分館も開店休業、閉鎖、他への譲渡へと追い込まれていった。
●写真　1940・昭和15年7月21日総同盟の解散を決定した全国代表者会議

二、戦前最後の財団役員

総同盟解散後の状況は、明治期の、大逆事件後の「社会主義冬の時代」に勝とも劣らない、まさに社会運動の「暗い夜の時代」であった。時代は、「共産主義」、「社会主義」という言葉どころか「労働」という言葉すら官憲は抹殺しようとしてきた。今津菊松理事は西宮分館の例で次のように記録している。
戦争が熾烈になった或る日、私は突然兵庫県警察部高山特高課長から出頭命令を受けました。何事かと思って出掛けましたところが、話は意外にも労働会館の管理者としての私に「労働会館」の労働と言う名が目障り、耳障りだから戦時下にふさわしい名に変えろと言っのでした。これに対して私は即座に「労働会館と言っのは公法人として登記までしてある名称だから、警察が職権を以て登記簿の改変をさせるのは御自由だが、私の方から自発的に変更する意志はない」ときっぱり断りました。そうしましたら話はそれつきりになってしまって現在に至つたのであります。

（今津菊松「戦争中も押し通せた『労働会館』の名称」『労働運動一夕話』、全繊同盟、一九五二・昭和二十七年刊）

このような時期に財団を維持し、支えたのは松岡理事長ら役員であった、その役員等の献身と努力がなければ財団は解散に追い込まれ、今日の歴史は無かったのである。その戦前最後の役員に敬意をはらって、ここで氏名を紹介する。

理事長　松岡駒古

理　事　原　虎一　土井直作　徳永正報　三水治朗　井堀繁雄　熊本虎蔵

池　善二　富田繁蔵　斎藤　勇　岡田助雄　遠藤義明

畑田朝治　内田籐七　小原源一　大越半忠

評議員　松岡駒古　原　虎一　土井直作　徳永正報　三水治朗

井堀繁雄　熊本虎蔵　池　善二　富田繁蔵　斎藤　勇

岡田助雄　遠藤義明　畑田朝治　内田藤七　小原源一

大越半忠　赤松常子　田村米蔵　高橋正雄　八ッ田也一

勅使河原藤太　鈴木弥作　川畑幸蔵　横山冨治　山田重太郎

今津菊松　上垣弥一　金　光平

第二節　総同盟解散後の財団法人の維持、経営

一、総同盟解散後の事業成績

一九四〇（昭和十五）年七月の総同盟解散後の財団の「苦衷・苦闘」を『昭和拾五年度事業報告書』（一九四丁昭和十六年四月刊）は記録しているのでそれを先ず紹介する。

事業成績

本年度は本財団創立以来十一年、最も多事多難なＩヶ年であった。それは本財団の成立母胎であり、且本財団の絶大な擁護者であった「日本労働総同盟」が時局の変転に伴ひ嚇々たる永き歴史に終止符を打って解散したからである。云ふ迄もなく本財団の役員は総て総同盟の役員であり、殊に全国各地に散在してゐた分館の悉くは総同盟支部の建設し、利用してゐたものであったから、総同盟の解体は同時に分館の閉鎖であらねばならぬといふ悲しむべき現実に逢着せねばならなかった。それは我々が三十年の間、世のあらゆる不自然な矯激な社会運動を克服し指導する事のために、文字通り死闘しフゞけて来た結晶である城砦が極めて冷酷に空しく奪ばれる事であった。しかし、本財団は本質上之を惜しむ事なく、むしろ従来の総同盟へ依存してゐた経営を抛擲して健全なる自立的経営の確立に邁進のスタートを切った。そのために分館は六分館に減じ、尚、今後更に整理の止む無きものもあるが、本館は挙げて病院事業拡充のために改造に着手し、第二病院も健康保険の診療を開始して工場地帯の医療機関としての使命を果たしつゝあり、アパートは解散せる総同盟の社合部より大井友愛館の寄附を受けて（但し十六年一月以降）三ケ所に於て殺人的住居飢餓緩和のため努めつゝあり、食堂は亦食糧欠乏と闘ひ乍ら後記の如き驚くべき成績を挙げ来って、それぐ所在地方に於ける勤労者の福利のために資し、併て国家産業の隆昌のために斟からざる貢献をなし得たる事を確信するものである。

尚、特記すべきは、本年度亦畏くも宮内省より事業奨励の思召を以て御下賜金を賜るの光栄に浴したる外、厚生省、東京府、東京市、三菱社より引続き助成金、奨励金の交附を、又、パイロット万年筆株式会社より病院拡張費として寄附金を受けるの名誉を得たるＯＡＪである。本財団は一層努力奮励して以て鴻恩に報ひ奉らんことを決意する次第である。

このように総同盟解散後の財団の事業は、第一、第二友愛病院とアパート第一、第二青雲荘、大井友愛館、それに神楽坂食堂の経営に限られたのである。

二、分館の整理

総同盟解散にともなって組合員の集会、文化、教育、福祉活動は続けられなくなり、前述のように労働会館の維持は非常に困難となった。「異体同心とも云よべき『日本労働総同盟』を失ひだる本財団は恰も車の片輪を失ひたるが如き状態となり、専ら総同盟支部の利用にのみ供してゐた分館は其の維持の方法を失ひ」ス昭和十五年度事業報告書』という事態になった。

そこで財団は、その所有する分館について、処分が出来ところから処分をしていった。総同盟解散から八ヵ月後の一九四一（昭和十六）年三月三十一目までに次のように一一分館のうち五分館が処分された。なお、金町分館は総同盟解散前に財団の経営、管理を離れ、一方、新たに桜田分館を経営、管理したので分館の数は一一分館と総数は変らなかった、

1、川崎分館　川崎市へ委譲す、

2、平塚分館　平塚市町会へ譲渡す。

3、潮田会館　同分館建設並に管理に貢献したる本財団評議員川畑幸蔵に譲渡す。

4、兵庫分館　東京製鋼株式会社に譲渡し会社の産業報国会に於いて元支部員のために引続き利用されてゐる。

5、桜田分館　桜田製作所産業報国会に寄附しド几支部員等の組織する桜田購買組合等に使用されてゐる。

（財団法人日本労働会館『昭和拾九年度事業報告書』一九四五・昭和二十年八月三十一日刊）

残りの本館と六分館の管理、運営の問題も非常にむずかしく、次のような状況となった

1、本館（東京市芝区三田四国町二番地六）

元日本労働総同盟整理委員会、新労働社所在中なるも今後専ら友愛病院の拡張に充てんため目下改造工事中である。

2、保土ヶ谷分館（横浜市保土谷区峯岡町一〇一七番地）

目下整理準備中

3、川口分館（川口市金山町一四二の二）
川口市一帯の工場労働者の組織する川口購買組合の使用に任じ異常なる成績を挙げつゝある。
4、城東分館（城東区大島町二丁目八九番地）
目下あたらしき利用方法につき研究準備中である。
5、西宮分館（西宮市東町二丁目六四番地）
西宮市を中心とする労働者の組織する西宮消費組合の専用に供し物資難を克服し異常なる成績をあげてゐる外或は支部語講座を開講し、或は葬儀を迄取扱ひ以て生活改善の指導をなす等富に刮目すべきものがある。
6、市川分館（市川市市川五丁目）
目下整理準備中
7、因島分館（広島県御調郡土生町宇塩瀬浜一八九九番地）
因島一円の労働者の組織する因島消費組合の専用にして精米所を併せ経営するの外自動車事業等も経営して因島の生活文化の指導に任じ之亦異常の成績を挙げつゝある。
（前掲報告書）

三、空襲と会館、病院などの消失

総同盟の解散で事業、経営が困難な状況に追い込まれた財団にとって、戦局の激化、東京空襲は致命的ともいえる打撃となった。
総同盟の解散後病院の経営に力を入れ、空いた日本労働会館の部屋を利用するために一九四一（昭和十六）年二月七日に監督官庁の警視総監宛「病院敷地拡張並に建物増加使用」の届を提出、三月七日に許可が下りた。戦時景気の中での労働者の東京集中、一方、国民健康保険法の施行もあって診療者は増加していった。

国民健康保険法は、「支那事変」勃発翌年の一九三八（昭和十三）年一月十一日に厚生省が設置されたあとの四月一目に施行された。翌年四月六日には船員保険法が成立、太平洋戦争闘戦後は「健兵健民政策遂行」のため法が改正され（『厚生省二十年史』一九六〇・昭和三五年刊）、被保険者が拡大されていった。

友愛病院は会社、工場の健康保険組合嘱託医となり、一九四四（昭和十九）年三月一日から警視総監と船員保険の被保険者の診療についての契約まで行なった。

こうした病院とアパートの経営も、その後の戦局の激化にともなって東京への空襲の危険が迫り、東京からの疎開などで住民が減り苦しくなっていった。

そうした中で、一九四五（昭和二〇）年三月十目の東京大空襲で残っていた城東分館がまず消失した。続いて五月二十二目の太空襲で労働会館本館と神楽坂食堂も消失した。

本館が焼けた時は、友愛病院に勤めていた福井うゑの看護婦長が「涙をながして見て」いた。それは当時の思い出を語ったなかの一こまであるが、病院関係の記録にも言及しているので次にその全文を紹介する。

私は病院勤務でしたが、赤松常子様がよく世話しこ下さいました、私をけじめ、看護婦の近藤しづさん、食堂の阿部あいさん、圭た田代みねさんの令妹で事務をやっていた堀節江さんなども本部へもよく参り、今でもどの椅子にどなたがいらしたかが目に浮かびます。

鈴水文治様の横にいたとき「大本に蝉が止まったようだ」と笑われたことも思い出します。看護婦たちは本部の方に、それぞれニックネームを付けていました。またよくピンポンをやりました。とくに穂積七郎様がことに多かったと記憶しています。

松岡会長様、原虎一様、徳永正報様、畑田朝治様方とは家族ぐるみのお付き合いをさせてもらいました。焼夷弾で本館、病院の焼けますのを道の反封側でボロボロ涙を流して見ていました。

メーデーの時も白衣で医療班でついてゆきました。

（記録・友愛会創立を記念する会』一九八三・昭和五十八年八月一日刊）

●図　戦争末期の事業活動をまとめた『昭和拾九年度事業報告書』1945・昭和20年8月刊

労働会館は完全に焼け、残ったのは友愛病院の鉄筋コンクリート造りの三階建ての建物だけであった。それも病院としては到底使用できる状態ではなく、結局、戦災と同時に廃院に追い込まれた。それより前、川崎市にあった第二友愛病院と第二青雲荘も四月十四日夜の川崎大空襲で土台を残すだけで完全に消失した。

一九四五（昭和二十）八月十五日、こうして敗戦を迎えた財団法人日本労働会館は、その事業基盤を失い、財産として残っていたのは本館の土地、内部が焼けた病院の建物、大井友愛館と地方の川口分館、因島分館、それに西宮分館の焼けた跡地だけであった。

戦後の財団の出発はこのきびしい中から始まるのであった。

第四章　戦後の総同盟再建と財団法人日本労働会館

一一九四五・昭和二十年八月～六三・昭和三十八年一

概　観

一九四五（昭和二十）八月十五目、日本はポツダム言言を受諾し降伏、敗戦となった。アメリカ軍を主力とする占領軍の民主化政策の柱の一つに社会運動、とりわけ労働組合組織の育成があり、急激な労働運動の展開が見られた。

財団法人日本労働会館の敗戦時の財産は、既述のように大井友愛館、因島、川口の両地方分館、西宮分館の焼けた跡地と空襲で焼けた日本労働会館の敷地に内部が焼けた鉄筋三階建ての友愛病院の建物だけであった。

財団は、戦後最初の事業として、友愛病院の建物を改修し、そゝ一了、焼けた神楽坂食堂の外食券食堂の権利を生かし芝園橋食堂を翌年初頭から開店した。

一九四六(昭和ニトコ年八月一日に第一回全国大会を開いた総同盟(日本労働組総同盟・会長松岡駒吉)は、その本部事務所を東京神田の救世軍本営に置き、さらに京橋の明治屋ビルに移っした。しかし、明治屋ビルは一九四八(昭和二十三)年末までの借用期限であったため会館建設が急務となった。こヽつして、一九四八年に入り総同盟会館の建設を決定し、募金活動白開始した。その建設場所として財団が所有する日本労働会館の焼け

跡が決まった。そこには同時に全繊会館も建つことになった。

両会館は一九四九（昭和二十四）年八月四日に落成武を行なった。財団は両会館の地主になったのである、総同盟会館は、翌年の総評結成による分裂後は再建総同盟の本部として使用された。

一九五八（昭和三十三）年八月十四日、財団創没者の松岡駒吉理事長が逝去、二代目理事長に原虎一が就任した。

第一節　財団法人日本労働会館の事業の再開

一、労働会館焼け跡の惨状と旧友愛病院建物の修復

一九四五(昭和二十)年五月の空襲によって木造だった日本労働会館の本館とアパート青雲荘が全焼し、鉄筋コンクリート三階建ての友愛病院の二、三階部分か全焼、一階部分が焼け残った。

財団法人は、罹災直後から、その焼け残った友愛病院の建物の改修に取りかかった。そして同年暮れに松岡理事長の実弟の松岡泰蔵一家がその一階に住みんだ。

「二、三階は完全に焼けたけれど、一階は防火壁かおり医療器具なども残っていた程で、便所をなわし

た程度で住めました、一階の診察室に畳を敷いて部屋にしました。だだっ広くうすきみ悪い程でした。二階の非常階段が地上に降りており浮浪者が二階に泊まっていたようで父が階段をはずしました。

労働会館、アパートは完全に焼け、労働会館の地下室の跡には水が溜まり机が浮いていました。あの辺で残っていたのは日本電気、戸板女子学園、映画館の芝園館位であとは焼け野原でした」（奉蔵氏の長女房江氏・のち中島桂太郎氏夫人談）という状況であった。

二、敗戦後の財団の事業は芝園橋食堂の経営から

この旧病院の改修は病院、アパートを建てた旗手組によって行われた。改修後、敗戦翌年の一九四六（昭和二十一）年の寒い時期から二階半分で「芝園橋食堂」を開店、三階が食堂従業員の宿舎に当てられた。

財団が食堂を経営することになったのは、経営していた牛込（新宿）区にあった神楽坂食堂が戦災によって焼けた。だが、その外食券食堂営業の権利だけは残っていたからである。当時の食料難の時代にその権利を放棄するのはもったいないと松岡理事長が開店にふみきったのである（中島房江氏談）。

そして、その経営に当たらせたのが実弟の泰蔵であった。泰蔵は腕の良い和菓子職人で、長く五反田駅前で和菓手屋を開いていた。しかし、「支那事変」後は戦時経済統制令で思うように菓子もつくれなくなり、そのうえ徴用もされるのでは、と廃業し、蒲田の友人の軍需工場に務めたのである。こうした商人としての腕と生来の真面目、きちょうめんさを兄の松岡理事長に見込まれてのことであった。

「芝園橋食堂と名付けたのは、会館のすぐ近くの橋が芝園橋であり、走っていた都電の停留所名が芝園橋で、付近一帯を芝園橋と言っていたからです、食堂開店のポスターは紙の無いときであり、新聞紙に墨で「〇月〇日開店」などと書き、寒いなかを電柱に貼って歩いた記憶が今でも残っております」（中島房江氏談）とのような苦労もあったのである。

敗戦後の労働組合運動が、松岡の提唱で十月十日に労働組合組織懇談会の開催ではじまり、それが翌年一月に労働総同盟として発足し、組織も順次拡大していった。その頃に病院跡の改修も進み、三階の一部

をその総同盟の事務所として貸した。
財団にとっては、この食堂経営が敗戦直後の大きな事業であり、当時の食糧難から繁盛し、財団経営の支柱になっていたのである。
なお、芝園橋食堂はその後、一九六三（昭和三十八）年に三田会館建設に取りかかるため建物を解体する丶」とになり、それを機に廃業した。
芝園橋食堂の経営が財団の大きな収入源であったことは次の収支決算によって伺い知れる。
●表　食堂収支　会議室収支　会館工事支出

第二節　総同盟会館、全繊会館の建設と財団の関係

一、総同盟、全繊同盟両全館の建設

総同盟、会館建設を決議
一九四五（昭和二十）年十月十日、松岡駒害の招請によって旧総同盟、全労、全評などの活動家が参加して労働組合組織懇談会を開催、労働組合の再建に乗りだした、そして翌年一月に労働総同盟が発足、八月に総同盟（日本労働組合総同盟）第一回全国大会を開催した。この総同盟の本部は東京・神田の救世軍本営に置いた。この建物に本部を置く前の、総同盟組織準備活動時代の事務所は、修復した旧友愛病院の建物が使われた。
救世軍の建物は戦争中に産業報国会の本部として使われていたが、敗戦後の八月三十一日に産報が解散したので借用したのである。
総同盟本部はその後、翌一九四七年十月に旧救世軍本営から京橋の明治屋ビルに移った。
この明治屋ビルの借用期限が一九四八年末迄であった。このために一九四八（昭和二十二）年一月十三

日の中央委員会で総同盟会館の建設が決定された。
その建設の場所に決ったのが東京・三田四国町のかっての日本労働会館の有った場所、即ち財団法人日本労働会館の所有地であった。

総同盟会館と全繊同盟会館の二つが建つ

総同盟とともに全繊借同盟七会館建設を計画した。初代全繊同盟の会長が財団法人の松岡駒吉理事長であったこともあって総同盟会館と同じ場所に並んで建つ事になったのである。
総同盟会館は、建設費など総額六〇〇万円で、木造二階建て、延坪二〇〇坪などで建設費用などは次の通りである（総同盟機関紙『労働』一九四八・昭和二十三年三月十九日号）。

一金六百万円也　会館建設費一切
内　容
金　百五十万円　借地二百坪権利金他
金四百五十万円　木造二階建総延坪二百坪建設費
延坪二百坪建設費
一、会議室　一　二十坪　一、事務室　三　百二十坪　一、図書室　一　十坪
一、会長室　一　五坪　一、応接室　一　十坪　一、宿直室　一　五坪
一、炊平場　一　二坪　一、手洗場　二　四坪　一、倉庫　一　四坪
関東一般労働組合設計

二、館建設は組合員の募金で

会館建設募金の訴え

この会館建設の費用は総同盟組合員の募金によるものであり、機関紙「労働」一九四八（昭和二十三）午三月十九日号で次のように募金を訴えた、

総同盟会館建設募金に応ぜよ！

一人の負担金は五円　全組合員が義務を果せ

過般の本同盟中央委員会において満場一致で可決された、総同盟会館建設資金六百万円募集の件は、現在本部の事務所である明治屋ビルも立ち退きを要求されている状態で、是が非でも五月末日までには完遂しなければならない。インフレの昂進で、組合員諸君の生活も苦しかろうが、ピース一本吸ったと思って、一人五円の募金に協力して戴きたい。本部会館建設委員会ではこの運動をスムースに且つ効果的に進めるために色々考究した結果、大量に廉価で購入した物品を組合員諸君に購入して貰うことによって、五円拠出の義務を果して貰う方法も決定した。健全なる総同盟の運動を、更に強固におしすゝめるために、組合員一人残らず総同盟会館建設資金に応じられるように切望する。

一石二鳥の代案　物品買って会館建設

総同盟会館建設資金の募金は、昨夏以来活動資金や東北関東風水害義援金の募集、会費値上げ等が続いた後で、各地方連合会や産別同盟では、それが完遂に並々ならぬ努力を要することと思われる。本部会館建設委員会では、多少なりともこれを円滑に進めるために、次のような物品を揃え、これを組合員諸君に購入して貰うことによって、募金に応ずる義務を果たしたことになる仕組みをたてた。従って、組合員一人五円を現金で拠出するか、或いは物品を購入して貰うか、何且か任意の方法でこの運動に協力して貰いたい。物品による方法は次の通りである。

A品　便箋　四十枚綴　一〇円〇〇銭

B品　原稿用紙　三十枚綴　一〇円〇〇銭

C品　チヤントールパスター　二〇円〇〇銭

寄生性皮膚病特効優良薬　日本レーヨン製品（公）（二一円五〇銭）

右の内何れか一綴一点を購入した者は会館建設資金一人当金五円拠出の責任を果たしたものとして取扱います。

払込方法―準備の都合があるから地方連、産別同盟今通じ速達、電報等を以て至急入用見込数を御一報願いたし但し商品の都合によりA（便箋）三・B（原稿用紙）三・C（薬品）二の割合を以て申し込まれたし（例えば八万点申込の時は便箋三二万冊、原稿用紙三万冊、薬品二万点となる）

送品方法―中込順により直ちに発送する　なお荷造費及び送料は本部で負担

送金方法―代金は集金の都度内入金として刻々に送金し遅くとも四月中には全部を取纏め五月十日までには必ず残金が本部へ到着する様励行されたし

指定取引銀行―住友銀行日本橋支店、帝国銀行京橋支店

なお、見本はすでに各府県連や産別同盟本部に発送した通りで、何れも日常生活に必要な品物であり、値段も市価に比べて低廉である。切に組合員諸君の活用を期待する。

このような総同盟組合員の資金カンパによって会館建設は順調に進んでいった。

両会館の落成式

会館は正面右側に全繊会館、左側に総同盟会館が並び、コの字型につながる形で建った。山口設計事務所による設計であり、十一月に着工、翌一九四九（昭和二十四）年八月四日に落成武を行った。

落成武は新築なった総同盟・全繊会館で八月四日午後三時から行われたがその模様は次の通りである。

●図　総同盟機関紙『労働』1948・昭和23年10月一日号

明るい会館”と異口同音会館落成式盛大に終わる

総同盟会館および全繊会館の落成武は八月四目午後三時から全繊会館二階の会議室に労働省賀来労政課長、友誼諸団体炭労武藤会長らおよび新聞社関係者と総同盟全国代表ら四百名が参集して盛大に挙行され

た。高野総主事の司会で上条中執委が落成までの経過を

終戦後昭和二十年末にゝ」の芝園会館に総同盟準備会が作られたが翌二十一年には神田神保町へ、さらに二千一年十月には京橋の明治屋ビルへと一年毎に本部を移転、昨年春ようやく会館建設の準備を開始し、松岡会長の努力によって当地を財団法人友愛病院からゆずり受け〔注・財団法人日本労働会館から借用の誤り〕、昨年十一月に建設に着手、今日の落成に至った。

建坪は二五一坪（総同盟会館一一一坪、全繊会館一〇九坪）、共通ホール二九坪、費用は合計六百万円で山口設計事務所の設計により納富建築株式会社が建築した。なお、当地は日本最初の社会主義団体である明治三十三年の社会主義協会ならびに大正元年の友愛会が結成された場所として日本労働運動史上最も由緒深い処である。

と報告し、次いで総同盟松岡会長、全繊滝田会長がそれぞれ挨拶を述べ、納富建築株式会社社長ならびに山口設計事務所所長に感謝状が贈呈された。続いて賀来労政課長、炭労武藤会長、新聞記者代表らの祝辞が述べられ午後四時半閉会した。

なお炭労の武藤会長は友誼団体を代表し、本同盟の発展を祝して席上つぎのように挨拶を述べた。

新総同盟会館は明朗な印象を与えてくれた。過去の日本の労働運動はややもすれば暴力を肯定するような陰険な闘争に堕落しがちであったが、総同盟は今後もこの新会館のような明朗な、建設的な方向に日本労働運動を指導してくれるものと確信している。

（『労働』一九四九・昭和二十四年八月十二目号）

この総同盟会館は、総同盟や傘下の産別組合の本部として使われた。だが、一九五〇（昭和二十五）年七月の総評結成による総同盟分裂問題が起こり、総同盟解体に反対して同年十二月三日に発足の「総同盟刷新運動協議会」の本部となり、また翌一九五一（昭和二十六）年三月に「総同盟再建準備会」の本部、

同年六月の総同回再建・第六回全国大会の後はその本部、及び傘下の産別の本部として新会館建設まで使われるのであった。

財団法人日本労働会館六十年史年表

一九二八・昭和３年７月５日　日本労働総同盟関東同盟会第六回大会、会館建設を決議　会館建設委員長松岡駒古　直ちに募金・活動開始
一九三〇・昭和５年８月　６日　東京建物株式会社より惟一館の土地と建物を買収
一九三一・昭和６年４月２３日　財団法人目本労働会館設立許可申請を内務大臣安達謙蔵、文部大臣田中隆三宛に出す
６月　１日　日本労働会館の設計ができ、惟一館の犬改造による会館建設に着工
８月１７日　同日付で財団法人の設立許可　９月１５日許可到達す
９月１８日　「満州事変」起こる
９月２７日　日本労働会館開館式
一九三二・昭和７年４月　財団の経営による日本労働学校第一学期開講
一九三三・昭和８年２月１１日　日本労働学校に宮内庁より御下賜金　内務大臣社会事業奨励金、恩賜財団慶福会助成金、東京市補助金も受ける
３月２２日　評議員会で失業保険組合を計画　８月１日共済部失業保険組介事業開始
４月１２日　神奈川労働会館の寄附を受け、財団初の日本労働会館分館として川崎分館を登記、管理する　以後各地に分館を持つ
７月１０ロ　平塚労働会館落成式
一九三六・昭和１１年１月１５日　総同盟と全労の合同で全日本労働総同盟発足
６月　友愛病院とアパート寺雲荘落成　同月アパート開業
７月１日　友愛病院開業　院長中川鉄治郎

一九三七・昭和１２年７月７日　「支那事変」勃発
一九三八・昭和１３年４月　神楽坂食堂開業
一九三九・昭和１４年９月　川崎市に第二友愛病院と青雲荘完成　10月青雲荘、１１月病院間業
一九四〇・昭和１５年７月２１日　総同盟解散　各地の分館処分
同年　大井友愛館を受け入れ、翌年一月からアハート経営開始
一九四一・昭和１６年１２月８日　太平洋戦争勃発
一九四五・昭和２０年５月２３日　日本労働会館、空襲で消失
８月１５日　日本、連介軍に降伏、敗戦
一九四六・昭和２１年初頭　財団の戦後最初の事業として芝園橋食堂開業
３月１２日　友愛会創立者、友愛会・総同盟会長を務めた鈴本文治、郷里で総選挙に立候補、選挙戦のさなかに逝去
一九四九・昭利２４年８月　４日　日本労働会館の跡地に総同盟会館と全繊会館が竣工、落成式
一九五八・昭和３３年８月１４日　松岡駒古理事長逝去
８月　原虎一理事、理事長に就任
一九六一・昭和３６年１月　経営科学研究所設立
１１月　３日　全繊会館買収決定
１２月　３日　三田会館建設を理事会で決定
一九六３・昭和38年　８月１５日　『松岡駒古伝』刊行
一九六四・昭和３９年１２月２２日三田会館竣工　２４日開館
一九六五・昭和４０年　８月　２日友愛会創立を記念する会の初会合
一九六七・昭和４２年　６月２６日土井直生三田会館副館長逝去
一九七二・昭和４７年　３月　６日西宮分館跡地売却し神戸市生田区の木造二階建て、上地八三・六坪を取得　兵庫同盟に無償貸与　これを兵庫会館と称す

5月25日　三川会館について、友愛会館と会館経営等の一体化で契約、調印
7月　3日　原虎一理事長逝去
7月14日　仲堀繁雄理事、理事長に就任
一九七七・昭和52年　3月18日　ホテル三田会館が開館
11月　1日　川口分館老朽化のため処分、土地返却
一九七八・昭和53年　6月29日　『原虎一一労働運動家の生涯』刊行
8月　1日　「日本労働運動発祥之地」の記念碑を会館正面横に建立
一九八〇・昭和55年　3月　兵庫会館と土地を財団法人兵庫勤労文化会館に無償譲渡
一九八二・昭和57年3月2日　労使関係研究協会発足
一九八三・昭和58年7月18日　井堀繁雄理事長逝去
一九八ご・昭和58年8月23日　天池清次理事、理事長に就任
一九八五・昭和60年9月1日　鈴木文治生誕百年記念で鈴木文治『労働運動二十年』現代訳（長男鈴木文彦訳）刊行　郷里の宮城県金成町で生誕百年記念式典　大池理事長ら出席
一九八八・昭和63牛　4月　8日『労働運動の先駆　松岡駒古生誕百千記念写真集』発刊
一九九一・平成3年　8月17日　財団法人日本労働会館創立六十周年を迎える

執筆を終えて

渡辺　悦次

天池理事長から、財団法大日本労働会館が来年八月に創立六〇周年に迎えるのでその歴史會執筆してばしいとお話しがあったのは時間的にはぎりぎりの時であった。

お引き受けすることにしたのは、戦前の労働組合の事業活動についてこれまで関心があり、財団法人日本労働会館の活動こそは「昭和戦前期」の代表的なものであると思っていたからである。

今日、労働組介の事業活動は労働金庫運動、各種共済活動に見られるように活発になってきたが、戦後

の運動の発展に比べると必ずしもまだ十分と言えないであろう。それは、労働組介の運動姿勢にかかわっているといえよう。労働金庫運動一つとって見ても、総同盟岡山県連などでは早くから取り組んでいたが、総評の大部分の単産では当初必ずしも賛成でなかった。それどころか反対する方が多かった。これは、労働組合の事業活動を改良主義として軽視する戦前からの運動姿勢が反映していたからといえよう。

財団法人日本労働会館は、その戦前の運動状況のなかで日本労働総同盟を母胎として一九三一（昭和六）年に設立され、会館の管理から病院・友愛病院の経営まで行ない、戦前の困難な中を耐え抜き、今日にいたったのである、

本史は、財団法人目本労働会館の正史であるとともに、労働組介運動の事業活動の実践、研究の参考になればと思っている、

執筆に当たここに、中島房子氏ら財団関係者、そのご家族をけじめ大池理事長、渡辺理事、金杉本史編纂委長長らに青重な歴史的証、資料の提供などのご協力、ご鞭撻をいたこいたことに深く感謝致します。

編集後記

編集委員長　金杉　秀信

『財団法人日本労働会館六十年史』の編集に当って、最も重要ななことは、財団設立より今日まで六〇年間に亘る財団の事業活動と、その業績にかかる諸資料が、どの程度、収集できるかということにありました。

同時に、その素材をもとに―昭和初期の社会情勢のなかで、財団を設立した意図を始め、―労働組合の福祉、共済、教育活動の原型を築き上げてきた、まさに、筆舌につくしがたい―財団事業活動の持つ歴史的、社会的意義。その目標に思いをよせた日本労働総同盟組合員と、先駆者たちの労働組介主義の運動にかけた真実を如何にまとめあげるかということでありました。

空襲による日本労働会館、財団事業の病院、アパートなどが被害にあい資料の消失、埋めなければならない空白箇所もありました。ために大池理事長が率先し戦前の組合員有志や関係者家族を尋ね、対話の機会を準備するなど、聞き取り取材をおこなってきました。

本文執筆（と資料の整理）については、冒頭の「刊行に当たって」に紹介されているとおり法政大学大原社会問題研究所の渡辺悦次氏の献身的なご尽力をいただきました。

渡辺康正理事には執筆者との何回にもわたる連絡、編集打ち合わせ、また印刷所との連絡などの面を担当していただきました。

八ッ田也一、大迫栄治両刊行委員会副委員長には戦前、戦中、戦後の財団事業活動にかかる直接、間接のご助言をいただき編集作業を補強していただきました。

六十年史刊行の企画決定より一年有余、刊行委員会のご理解と支え、励ましをいただき、ここに『財団法人日本労働会館六十年史』の編纂を終えることができました、

編集後記をおかりし、改めて年史編集に当たって親身に、ご協力をいただいた多くの方々に対し、心よりお礼申し上げる次第であります。

平成三年八月十七日

財団法人日本労働会館六十年史
―労働組合主義の実践・その福祉教育活動の原型を築く―
一九九一・平成三年八月十七日　初版発行
著者　渡辺悦次
発行者　財団法人日本労働会館
理事長大池清次
発行所　財団法人日本労働会館
東京都港区芝二丁目二十番十二号
電話〇三（三四五一）五八九八番
ＦＡＸ〇三（三四五一）九一一七番
印刷者　株式会社　光洋社
東京都新宿区山吹町三五六
電話〇三（三二六九）〇二一一㈹